

「支那」新文学者と日本統治下の台湾

— 郁達夫の台湾訪問に関する一考察 —

武 継 平

Abstract

Yu Dafu is the only modern writer from mainland China to have visited Taiwan during Japanese occupation. Which nature could we make of the visit, just six months ahead of the “July-seventh Incident” when Japanese troops invaded Northern China? It is a “political event”, or the general literary exchanges, or author’s ordinary travel? What activities did he undertake during his stay? How was the visit related to his previous visits to Japan? What were the responses from local press? How was he interpreted and envisioned before and following this visit? Are there any writings with regards the visit? These issues of critical relevance to modern Chinese literary history and Sino-Japanese relationships have been unresolved due to lack of resources. Through the Japanese pre-war official secret files and a detailed investigation of the first-hand materials in Taiwan, this paper reconstituted this episode and provided further reliable substances for fleshing out the literary history.

Key Words: Yu Dafu, Taiwan, “Cultural Causes towards China”, Japanization

- | | |
|------------------------|---------------------|
| I. はじめに | II. 郁達夫の台湾訪問の位置づけ |
| III. 台湾訪問の日程と地元メディアの反応 | IV. 『躍進台湾を正視しに』について |
| V. 台湾に関連のある郁達夫の著述 | VI. 結 語 |

はじめに

二十世紀20年代から30年代にかけて中国文学界で絶大な影響力のある創造社の領袖人物で小説家である郁達夫は1936年の末に一度日本統治下の台湾を訪れたことがある。この出来事に関しては、従来出版されたどの『中国現代文学史』でも、詳細な記述を見ることができない。郁達夫研究の基本資料を紐解いても、中国国内出版の『郁達夫研究資料』（中国現代文学史資料匯編乙種）¹ はいうまでもなく、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（以下は「東文献」と略す）から発行された『郁達夫資料総目録附年譜』² および『郁達夫資料補編』³ のような

1 王自立、陳子善編、天津人民出版社1982年12月出版。

2 伊藤虎丸、稻葉昭二、鈴木正夫共編、1969年10月東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター出版。

3 伊藤虎丸、稻葉昭二、鈴木正夫共編、上下。1973年3月-1974年7月東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター出版。

もっとも権威的な研究資料でも、史実の概略は記述されてはいるものの、この詳細や裏づけなどに欠ける嫌いは払拭できない。1985年中国の『新文学史料』に掲載された福建省郷土史研究家陳松溪氏の『郁達夫の台湾訪問』⁴は、この問題を取り上げた最も詳細な資料と見受けられるが、エッセー風に書かれており、披露した「事実」の裏づけがされていないばかりか、史料文献の引用でさえ出処がいっさい明示されていない。そのため、学術的なレベルで評価できるものではないと思われる。

1936年末といえば、時は世界を震撼させた「盧溝橋事件」が勃発する6ヶ月前であるが、その時にあった郁達夫の台湾訪問は一体国家利益が背後にある「政治事件」なのか、それとも一般的な文人遊歴だったのか。台湾滞在中、郁達夫はいったいどのような活動をしていたのか。彼の台湾訪問はその直前にあった日本公式訪問とは関係があるかどうか。台湾地元メディアでは中国から来訪した郁に対してどのような反応を示していたのか。訪問前後彼は台湾でどのように見られ、そして位置づけられていたのか。その後彼は台湾訪問となんらかの関連作品を書き残したかどうか。これら一連の問題は、原因が様々であろうが、従来の中国現代文学史研究の中では明らかにされたことはないのである。

先行関連研究を振り返ってみればわかるのだが、最も欠落している史料はいったい何なのか。台湾の史料なら現地へ行けば入手は不可能ではないだろうが、もし、台湾人在日学者戴國輝氏が推論しているように、郁達夫の台湾訪問にはほんとうに日本政府と福建省政府両方が絡んでいるとすれば⁵、郁本人がそれに関して何も書き残していないからには、事実を裏づけられる政府間の公文書の発見を待つしか検証できまい。

思うに、郭沫若や郁達夫研究が最も盛んな中国では、研究対象者本人または同時代に生きる関係者の回想記などを基にして歴史的事実の検証を行おうとする事例はしばしば見られるが、方法論としては実事求是という科学の本道を逸しているように思われる。なぜなら、当事者の言説、とくに文学者の自叙伝などの場合、過去が主観的に再構築されがちであり、事後に書かれる回想記も記憶ミスの恐れがあるからである。文学史の「事件」として扱うには、必ず事実検証をせねばならない。本論文はまさにそこを切口として、情報開示法のおかげで一部公開になった戦前の日本外務省公文書、1936年当時台湾統治者の声を発信するいわゆる御用新聞だった『台湾日々新聞』⁶と唯一漢文の一部掲載が許され、ある程度の「民意」が読み取れるであろう『台湾新民報』の三点原資料に基づき、今までの研究で事実上把握できていない上記の問題について考証を進めていきたい。論考の過程で「郁達夫台湾滞在中の言論批評」および「台湾文学にある郁達夫訪問の影響」などの新たな問題浮上が必至だが、いずれも本研究の土台の上に構築しなければならぬものであり、本論では紙幅の関係でとりあげないことにする。

4 1985年『新文学史料』第3期掲載。

5 戴國輝論文『郁達夫と台湾』。台湾『近代中国』No.152、2002年12月。同論文ではその推論を裏付ける事実根拠は示されていない。

6 本論文に使われた『台湾日々新聞』（1936年）は台湾漢珍数位図書株式会社から提供されたマイクロフィルム資料の電子版によるものである。

(一) 郁達夫の台湾訪問の位置づけ

1936年12月の台湾訪問に関する郁達夫本人の記述として、時間的に「台湾訪問事件」の発生にもっとも近接するのは訪台中の同月23日の講演である⁷。『台湾日々新報』の要請で当時台北最高級の鉄道ホテルにて日本語で行ったものだが、題は『中国文学の変遷』である。「私は一介の書生として今度福州に帰る道すがら、台湾の躍進雄姿を見る事が出来、又本々は皆様にお目に掛る事を得て誠に光栄と存じます次第であります」、という日本語の書き出しには「帰国のついでに台湾訪問」のニュアンスが強い。このような当事者本人の言説の響きは従来の研究でよく引用される『毀家詩紀』にあった「この年の冬日本各社団および学校の招きで東京に講演しに行く。一ヵ月後遠回り道で台湾に至った」⁸との言い方や、「達夫は12月19日に東京を立ち、台湾経由で中国大陸に戻ったのである」という日本文学研究者小田嶽夫氏の証言⁹とも、三者ほぼ合致しており、ポイントは「訪日帰国のついで」にある。

さらに台湾の資料を見てみよう。

まずは郁達夫本人の言に近い「帰国のついで」の台湾訪問説が主流だともいえよう。1936年12月23日台湾新民報社主催の「郁達夫座談会」に同席し、随筆『達夫片片』を同年12月20日から『台湾新民報』に19回も連載した台北帝国大学東洋文学科在学学生作家黄得時をはじめ、事後回想記を発表した台湾人文学者の李宗慈、陳逸松なども「郁達夫が東京滞在中、台湾日々新報社の要請をうけて帰国のついでに台湾を一週間訪れることになった」^{10,11}と主張している。

一方、それに異を唱える台湾人もいる。在日台湾人学者戴国輝氏は、郁達夫は福建省政府経済参議を務めていたから、省政府主席の陳儀から経済視察の特命を受けて台湾にやってきたのではと指摘している¹²が、当時の福建省と日本外務省または台湾総督府間の公文書や備忘録などに基づいた発言ではないので、洞察力を見せたものの、推測の域を出ていない。

以上から見て、今までの「定説」をなした認識の共通点は「台湾訪問はもともと計画したものではなかった」、または「日本訪問とはなんら関係ない」というふうに、「事件」を読み取ることができる点にあるのではなかろうか。

だが、事実は決してそうではなかった。筆者がすでに拙論「1936年郁達夫訪日史実新考」に出した結論のように、郁の日本訪問は日本国外務省昭和11（1936）年度の「対支文化事業」の

7 『台湾日々新報』で確認したところ、当該講演の内容は1937年1月14日～16日まで三回にわけて連載されている。

8 郁達夫『毀家詩紀』、初出香港雑誌『大風』、1939年第3期。

9 この引用は『郁達夫伝記二種』（小田嶽夫・稲葉昭二共著、李平・閻振宇共訳）p.110、浙江文艺出版社1984年6月第1版によるものである。1936年郁達夫訪日時には小田嶽夫や佐藤春夫などは東京で接待していた。

10 李宗慈『訪黄得時・談郁達夫』台湾当代文学雑誌社編『当代文学史料研究叢刊』第2期、台北市・大呂、1987年。p.275。

11 陳逸松回憶録『太陽旗下風滿台』台北市、前衛：1994年。p.261。

12 戴国輝『日本人とアジア』、新人物往來社、1973。

援助項目で、「日支親善のため」の国家重大外事プロジェクトであった。企画から各地視察の手配および補助金の捻出まで終始外務省文化事業部と外務省外事課が直接担当しており、決裁事項は当時の外務大臣有田八郎が直接関わっていた¹³。本論文で取り上げる台湾訪問は日本訪問終了直後に実施されたのであり、外務省が策定した「著名支那文化人日本視察計画」の一環にすぎない。台湾方面で外務省の指令をうけ接待にあたったのは台湾総督府官房外事課の坂本龍起課長であった。

さらに、1936年の郁達夫は二重の身分を有していた。従来知られている中国著名新文学者の外に、また福建省政府で経済参議兼省政府広報室長を務めていた。「親日派」で知られる福建省政府主席の陳儀は前々から台湾経済の飛躍的な発展に高い関心があり、福建省の発展の手本にしたいと考えていた。筆者の手元にある当時の外交秘密公文書のひとつである『1936年4月20日付外務大臣有田八郎宛中村豊一署名公文書』¹⁴によれば、陳儀は確かに経済学部出身の参議郁達夫を台湾視察に派遣したいと、当時福州日本総領事中村豊一に意向を伝えていた。陳儀は「文學方面ヨリ青年ノ日本ニ對スル認識ヲ深メント試ミ又近々郁達夫ヲシテ臺灣方面ヲ視察セシメ度意向ヲ有」するが、「経費不足で実現できないでいる」から成就させてほしいということである（文末原史料写真①を参照されたい）。台湾視察の人選が郁達夫に決まったというのは、彼が東京帝国大学経済学部出身でしかも北京大学で統計学を教えていたからであろうが、経済学のエキスパートとして日本統治下の台湾を見学させたいというのも筋が通る話である。関係のある話だが、東京で会った日本人の旧友に来訪の目的を聞かれて、郁ははっきりと「福建省政府広報室のために品質がいい日本製輪転機を購入するためだ」¹⁵ 言っている。

ところが、外務省文化事業部が作成した郁達夫の訪問日程および外事警察の監視詳細記録について綿密な調査を行っても、「輪転機を購入」した事実はまったくなく、筆者が調べて作成した台湾訪問日程（後で詳細を明らかにするが）からも「経済や行政関係の視察活動」らしきものは一切なかったのである。1936年日・台訪問滞在中各地のメディアの報道内容、郁達夫の講演内容、および公刊しあるいは公の場で発した言論など根拠に総合的に判断すると、日本台湾両地の訪問はあくまでも五四新文学者の身分で活動を展開させていたもので、行く先々で文学者として受けられそして報道されていたのである。東京や台北で数回にわたって行った講演も、ほとんど中国の言語、文字または文学の話ばかりだった。たとい東京で日華学会と中華留日キリスト教青年協会合同開催の学術講演会で500名もの中国人留学生たちの前で「反日宣伝扇動的講演ヲ為シタ」¹⁶ 時でさえ、話題は終始文学の域を出ていなかった。

13 詳しくはCSSCI学術雑誌『中国文化研究』2010年第1期掲載の拙論をご参照願いたい。

14 日本外務省資料館所蔵『滿支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係』第19巻中“機密158号”で、「秘秘」、「要処分」との朱印がある。

15 前掲注1と注2の資料ではこのことが確認できる。

16 拙論『1936年郁達夫訪日史実新考』の公刊によって、従来の中国現代文学史に記録されてあるこの事件は大きく書き換えなければならないこととなった。

(二) 台湾訪問の日程と地元メディアの反応

前述した東京大学東文献から出た『郁達夫資料』と『郁達夫資料補編』は郁達夫の台湾訪問日程に関しては、中国側の資料より詳しいが、それでも記載内容はだいぶ欠如している。しかも、きちんと整理していない。更なる一步の研究のために、下記の3点の資料を基にして『郁達夫訪台日程』の作成を試みた。

- ① 1936年11月～翌年1月『台湾日々新報』および『台湾新民報』
- ② 『陳君葆日記』香港商務印書館1999年4月出版。
- ③ 『郁達夫資料補編』（上下）、1973年3月～1974年7月東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター発行。

12月22日	☆風波のため予定時刻より遅れて午後2時30分郵船「朝日丸」でキールン港に着き、台北鉄道ホテルに宿泊。
12月23日	☆午前11時総督府越村翻訳官の案内で台湾総督府を訪れ小林躋造総督に面会し、來台訪問の挨拶をした。「魯迅亡き後の支那文壇の巨匠」と紹介された。 ☆午後3時台北鉄道ホテル2Fホールにて台湾新民報社主催の「郁達夫座談会」に出席。5時に閉会。 ☆午後7時35分台北鉄道ホテル「余興場」にて台湾日々新報社主催の一般市民向けの「郁達夫学術講演会」に出席。講演のテーマは「支那文学の変遷」。8時25分に閉会。その後「有志座談会」に出席。9時に終了。
12月24日	☆午前8時に台湾帝国大学図書館訪問。所蔵漢籍の豊富さは東京帝国大学図書館に劣らないと絶賛。 ☆昼12時半、六高一期生の先輩で台湾警務局二見長官代理に長官官邸まで招かれ、午餐会に出席。 ☆午後6時、台湾帝国大学東洋文学会主催の「郁達夫歓迎会」に出席。同大学教授で著名な漢学者神田喜一郎と台湾高等学校教授で著名な文学評論家島田謹二など数名の日本人学者たちと交流。出席者は外に矢野峰人、原田季清、稲田尹、黄得時、呉守禮、田大熊ら八名。
12月25日	☆午前9時5分台北駅発の汽車で南下。 ☆午後5時10分、台中より嘉義に着く。夜、宜春楼で開かれる「有志者座談会」に出席。青柳に投宿。
12月26日	☆汽車で嘉義をたち、阿里山に向かう。阿里山に宿泊。
12月27日	☆阿里山を後にして嘉義市に戻る。午後3時33分の列車に乗って台南へ向かう。台南鉄道ホテルに宿泊。
12月28日	☆安平、烏山頭を視察。台南鉄道ホテルに宿泊。
12月29日	☆郵船「福建丸」で高雄港を立ち、台湾を後にしてアモイへ向かう。

以上の日程を手がかりに調べていけば、郁達夫の台湾滞在中の活動は総体的に把握することが可能である。神戸港から出た日本郵船「朝日丸」に乗って1936年12月22日に台湾キールン港に到着し、ちょうど一週間後の29日に、今度は「福建丸」で高雄港から台湾を立ち福建へ帰国した。日程を見てもう一つ気づくのは、滞在中は台北から台中、そして台南まではほぼ全島を縦断したにもかかわらず、公開活動は台北市内一箇所に集中的にセッティングされている、ということである。台湾の政府要人や在台著名日本文化人が郁達夫を囲む少人数の文芸座談会といい、一般市民向けの大型講演会といい、表向きではそれぞれ新聞社主催の文化交流となっているが、実際はどれも裏で総督府外事課によって操作されている。外務省の狙いは、いうまでもなく日本国による台湾統治の成功を実例として大東亜共栄構想をアピールすることであった。

一方、郁達夫講演会は「国防文学」と「支那文学の変遷」という二つの話題で展開されていたが、内容は大陸新文学論争の一般的な紹介にとどまるもので、台湾文学との接点、そして大陸文学者の立場から見た台湾といった敏感な問題には終始触れることがなかった。植民地に身を置いて母国語の「漢語」による創作の自由が完全に剥奪された台湾文学者たちは、中国新文学の代表作家郁達夫の台湾訪問に感激はしたものの、期待していた刺激を得ることはできなかったのである。

台北訪問が終わり、つづいて台中に向かうときからは、郁達夫の文学活動は一段落を告げた。台中経由で台南に回り、そして台南を後にするまでは、総督府外事課が事前到手配した各地の表敬訪問および台湾を立つ日に「漢語文学」をアンダーグラウンドでやっている数名の文学青年と私服警察の監視下で会見し¹⁷、数分間話し合っていた以外は、「視察」といえども、阿里山景勝地、安平古堡、烏山頭巨大ダムなどといったような台湾屈指の観光地を走馬灯のように走り廻る毎日だった。

当時の台湾メディアの反応を見ると、郁達夫の訪問に比較的高い関心を示したのは『台湾日々新報』と『台湾新民報』の二紙であった。ともに日本語の新聞だが、前者は日本統治下発行部数最大のオフィシャルニュースデーリーで、支配者である日本政府のイデオロギーを反映する「御用新聞」といっても過言ではなかろう。一方、後者は台湾で唯一台湾人が発行する日刊だがそれでも週に二回ほど漢文を一面だけ挟む日本語の新聞であるが、時は1936年12月だから、厳しい言論統制の下では台湾人のアイデンティティを発信することができない。その前身である『台湾民報』はかつて中国五四新文学の紹介で大きく貢献したことがある。魯迅、周作人、茅盾、郭沫若だけでなく、郁達夫の作品も訳出して掲載したことがある¹⁸。郁達夫が台湾を訪問した際、『台湾新民報』は自社主催の「郁達夫座談会」の内容を三回に分けて連載した(12月24日～29日)ほかに、当時は台湾帝国大学の学生で若い人気作家黄得時の随筆『達夫片片』を19回も連載している。このような『台湾新民報』に対して、『官製新聞』の性格を有する『台湾日々新報』は明らかに役割分担が違うように見受けられる。無論、事前に企画した「郁達夫学術講演会」の報道や講演内容を全文掲載するが、それより郁の台湾各地訪問を密着取材で追跡報道の紙幅は圧倒的に多かった。総体的に見て、文学よりも政治、外交そして行政の色が濃い。

『台湾新民報』には元々漢文版があり、二十世紀20年代後半から30年代前半まで張我軍およびその後任者の頼和などが文芸面の編集を務めていた頃は、中国大陸新文学の翻訳や紹介の主な担い手であった¹⁹。しかし、1936年9月2日(郁達夫が台湾を訪れる僅か3ヶ月前!)日本国現役海軍予備大将小林躋造は台湾総督就任後、海軍南進のための台湾基地化と台湾人に母国語漢語の排除を強制し、さらに改姓名を奨励する「皇民化」政策を極力推進していた。そうした

17 莊永明は『台湾紀事(上下)』(台湾時報文化出版1999年)にそれらの文学青年が尚未央、趙歷馬及び林占鰲だと実名を挙げている。

18 郁達夫短編歴史小説『故事』、1930年2月15日『台湾民報』。

19 『[台湾民報・台湾新民報] 総合目録』(中島利郎編、東京緑蔭書房2000年12月出版)ご参照願いたい。

中で、当然ながら『台湾新民報』漢文版も廃刊の運命を免れなかった。時期的に言えば、郁達夫の台湾訪問は、まさに日本に植民地化されて以来二回目の「軍人総督」の就任によって極端な植民地政策が実施されていた時と重なっているのである。言ってみれば、植民地台湾のもっとも暗黒な時代であった。

郁達夫が台湾を訪問している間、台湾総督府外事課によってセッティングされた二つの公開文化活動がとくに注目に値しよう。一つは特定の少人数参加の「郁達夫座談会」、表向きは『台湾新民報』の主催となっている。今ひとつは一般市民向けの公開講座「郁達夫学術講演会」、『台湾日々新報』の主催だった。後者の記録はマイクロフィルムによって保存状態がよく、そして比較的容易に閲覧できるのに対して、前者は中国大陸ではもちろんのこと、日本でも見ることができない紙媒体のものしかないため、前掲東文献出版の『郁達夫資料補編』を手がかりに真相に迫るしかない。

1936年12月24日付『台湾新民報』によれば、同月23日午後3時より当該新聞社の主催で来台した郁達夫が宿泊した台北鉄道ホテル二階のホールで2時間にわたる「郁達夫座談会」が催された。司会は『台湾新民報』の主筆を務める台湾人林呈禄で、日本人側からの参加者は、台湾総督府大浦視学官、越村翻訳官、台湾帝国大学神田喜一郎教授、大阪朝日新聞社台湾支社蒲田社長、大阪毎日新聞社台湾支社平野社長の五名だった。台湾地元側からは、総督府水産課劉明朝課長、黄純青府評議員、有名弁護士蔡式谷（明治大卒）、陳逸松（東大卒）、陳紹馨（東北大卒）および教育界の名士楊雲祥、著名文学者郭秋生、台湾帝大東洋文学科在籍中の文学青年黃得時とほか六名の『台湾新民報』記者が同席していた。

座談会は一問一答式で終始日本語で会話が交わされていた。十五名の同胞を目の前にしても郁達夫は母国語を一言も口にできなかった。司会者は「郁氏は私がお紹介申し上げなくても既にご承知の如く東大出身のお方でありまして劉水産課長とご同窓であります、ご帰国後は北平、武昌、廣州、安徽各大学の教授を歴任されました傍ら諸種の文芸運動に参加され又文芸作品を多数発表されました支那現代の文士でありまして魯迅氏亡き後の支那文壇を背負ふ第一人者でありますと同時に又日本のよき理解者であります」²⁰ というふうにならに主賓を会場に紹介している。

同席の日本人の中には当時の台湾政府要人が二人もいた。一人は総督府大浦視学官。地位は当時台湾総督府文教局長につぐ。今で言えば台湾教育部副部長の職に当たる。もう一人は台湾帝国大学の神田喜一郎教授である。この人物は背景が複雑である。京大出身で内藤湖南に師事したことがあり、本人も優れた漢学者として台湾帝大奉職中『支那学説林』、『佚存書目』、『敦煌秘笈留真』などを出版している。本研究とは別件の調査で判明したことがだが、近年出版された『陳君葆日記』によれば、日本軍が香港を攻略した際「御用学者の彼は日本政府から特命を受け戦勝者として香港大学馮平山図書館の接收を行った」²¹。敗戦直後（1945年7月）台湾が蒋介石政権に引き渡されたとき台北帝国大学は国立台湾大学に改名された。当然、神田は解職さ

20 「郁達夫座談会（一）」伊藤虎丸、稻葉昭二、鈴木正夫共編『郁達夫資料補編』（下）p.219。

21 『陳君葆日記（1944年2月3日）』、香港商務印書館1999年4月出版。

れたということである。台湾ではあまりにも有名だからか、まったく面識のない郁達夫は事前にぜひ会ってみたいと言っている²²。郁が台北に滞在している間、神田喜一郎は12月24日に開かれた台湾帝大東洋文学会主催の「郁達夫歓迎会」の際も郁と交流している。前掲『陳君葆日記』によれば、同会には同大学の島田謹二、矢野峰人、原田季清三教授も同席しているとのことである。

日台双方の参会者の身分から見れば、12月23日の「郁達夫座談会」は相当レベルの高い中、日、台三方著名知識人の交流会というふう位置づけてもよかるう。司会の林呈祿は『台湾日々新報』の主筆とはいえ、軍人総督が厳しい言論統制で「皇民化運動」を全面的に推し進めていた時代では、メディア人として台湾人のアイデンティティを代言することができないばかりか、結局台湾統治者の意思を伝えるカラクリ人形的な存在でしかいなかった。台湾人なのに、公の場所で日本のことを「内地各地」、中国大陸のこと「支那」、中台関係の改善を「日支親善の促進」とひねくれた言語表現を取らざるを得ないことから立場の苦しさがひしひしと伝わってくる。座談会で郁達夫のことを「魯迅氏亡き後の支那文壇を背負ふ第一人者」と紹介したのも郁達夫に対する台湾当局、もしくは日本政府の新たな見解だと見てよかるう。

一方、『台湾日々新報』は『府報』と新竹『州報』を兼ねて情報発信している。島民に対する日本語教育の徹底、日本文化の浸透といった時下の「皇民化政策」や「官」の意思を伝えるのというまでもないが、郁達夫の台湾訪問においても、外務省企画の「文化視察」として扱い、終始一貫して「日支親善」の立場に立っていた。

この度台湾漢珍数位図書株式会社アモイ事務所の協力を得て、1936年～1937年の『台湾日々新報』の電子版を検索、閲覧することができた。日本 YUMANI 書房から出版された35mm マイクロフィルム（全341巻）と同じく現存状態が最もよい北海道大学図書館所蔵の古い新聞を元に作られたものだという。調べてわかったことだが、郁達夫に関する報道は悉く1936年12月からの1ヶ月ちょっとの間に掲載されている。この点においては、『台湾新民報』と大きく異なっている。1936年12月5日の7面記事『郁達夫氏二十二日に着台、二週間の予定で巡遊』に郁達夫の名前がはじめて現れ、「東大経済学部出身」で、「今日の中国文学の代表者」、そして「郭沫若等の創造社に加はり活動する傍ら国立北京大学、武昌大学、中山大学等に教鞭を執り」、「雑誌『大衆文芸』を主宰、中国左翼作家連盟に参加、その後脱退……」と重点的に紹介している。郁に関する報道の最終回は1937年1月16日六面記事の『支那文学の変遷（三）』であった。その1ヵ月の間に『台湾日々新報』に掲載された郁達夫関係のものは計19編の報道記事と5枚の写真であった。そのうち、訪問日程の紹介は3編、各地の視察活動に関する報道は7編、郁達夫の訪問先でのコメントと講演内容は6編、コラムで話題になったのは3編であった。特に注目しなければならないのは、郁達夫の文学作品の翻訳紹介は『台湾日々新報』は一回もやったことがないという点である。19編もある郁に関する文字はすべて台湾訪問そのものに関するもの

22 1936年12月19日神戸港で『台湾日々新報』記者の取材を受けた。台湾で会いたい人物に神田喜一郎の名前をあげた。翌日の『台湾日々新報』に「郁達夫氏來台」という記事が出ている。

である。言ってみれば、御用新聞の『台湾日々新報』にとって、中国人郁達夫への関心は彼の文学にあらず、いかに新聞メディアを利用して当局の意思に従って「日支親善」のムードを濃厚に作り出すかにあったと思われる。

(三) 『躍進台湾を正視しに』について

1936年12月19日、郁達夫は日本訪問を終え「朝日丸」で神戸港を出て次の目的地——台湾へ向かった。出発直前に『台湾日々新報』日本駐在記者のぶっつけインタビューを受けた。その内容は『躍進台湾を正視しに』という標題で翌日の『台湾日々新報』11面に出ている。郁達夫がここで話したことは既存の郁達夫関係のテキストや研究資料文献に未見なので、ここに引く郁の発言の部分は新発見の佚文ということになる。

「渡台の目的は始政四十年の前進した台湾の姿を真正面から眺めたいのにある、書物を通じ雑誌や新聞で台湾のことはおぼろに知ってはいるが、正確なる認識を得たいためである。それと今一つは督府の施政につき何か学ぶべき所があれば大いに取り入れたい、それがためにできるだけ多くの人に会う心算であるが日程はすべて坂本外事課長に一任している。専門の方では、神田喜一郎台大教授や御社の魏清徳君とも語りあいたい。併し僅か一週間では目的は達成られないかもしれない。視察の結果はやがて紀行文にする心算である」²³。

話は単刀直入に台湾訪問の目的に触れている。このたびの研究でだいぶ明らかになった日台訪問の背景から考えると、「始政四十年の前進した台湾の姿を」「真正面から眺めたい」という郁自身の発言は、事実上それこそ日本当局の意向に沿うものだけということを見抜かねばならない。外務省が1000圓もの高額な補助金まで捻出して郁達夫を日台両地の訪問に招聘した²⁴ 本當の狙いは何なのか、それは郁達夫のような中国大陸で影響力のある「親日派」文士の筆を借りて日本の台湾植民地化の成功をアジア華人の世界で宣伝してほしい、ということに思惑があるのではなかろうか。郁達夫はそれを察してはいるものの、お金を受け取り、そして東京などで派手に使ってしまう、最後まで外務省の接待で日本と台湾を見て廻った。日中両国の関係が危機一髪に瀕しているころ、彼がこのような行動をとったからには、後々彼の中華民国作家とし

23 ここでの引用は1936年12月20日付『台湾日々新報』11面記事による。

24 1936年5月8日付「有田大臣發在福州中村総領事宛（第19號）」機密公文書では、次のような有田外務大臣の指示を確認できる。「郁達夫ニ對シ金壹千圓補給方案認メ右ハ東京ニ於テ可然キ方法ニテ本人ニ交付スヘキ。」外務省資料館所蔵未出版資料『滿支人本邦視察旅行関係雜件／補助実施関係』第19卷による。また『外務省の百年』（p.1045）によると、1930年11月から盧溝橋事件発生までの間、外務省の規定では、最高レベルの学者が中国に渡航する場合補助金の上限額は120圓／月。日本政府が郁達夫に提供した視察補助金はその前例を破っている。さらに陳明遠『文化人と錢』（百花文芸出版社2001）p.104にある『中国100圓に対する日本圓換算表』によれば、1936年11月中日圓の為替レートは100対105となっている。

での立場の問題が問われることになるのも当然であろう。

日台訪問の背景を明らかにしなかったことにも原因があると思われるが、日中開戦後の郁達夫が郭沫若らと同じように抗日宣伝活動の第一線に立ったので、彼の台湾訪問は中国大陸ではその後まったく問題にされなかった。そして、1939年彼が祖国の戦場を離れて遥々日本軍に占領されたスマトラ島に渡ったのも単に王映霞女史との婚姻破綻による傷心的放浪として見なされた。

戦後初めて郁達夫の台湾訪問について郁の立場を問いはじめたのは台湾人文学者だった。

台湾人文学者の龍瑛宗が1983年に出版したエッセー集『崎嶇的文学路，抗战文壇的回顧』の中でずばり郁の立場への疑いに言及した。

「郁が戦争開始直前に慌てて台湾にやってきた事実から見て、もしかして侵略主義者の言いなりになったのでは？」「祖国が存亡の危機に瀕しているころ、一人の文学者として、文学の魂は侵略者の誘惑に従うかそれとも祖国のために忠誠を尽くすのか……。侵略者の魔の手を逃れようとして彼は祖国を離れ天地の果てまで逃げた」²⁵。

龍瑛宗は元々日本語で創作する小説家で、1945年8月以降から母国語による創作を始めた一人である。台湾本土の作家としては、植民地の時代「皇民化教育」に対する屈辱感を特に身にしみて感じるのであろう。彼の言葉には「日本統治の時代に一度侵略者の船に乗ったのだから、中日開戦後戦場が中国にある以上、侵略者の手先になりたくなければ祖国を出るという自己放逐の方法しかない」というふうな「弦外の音」が聞こえなくもない。

郁達夫が台湾を訪問した当時は何も言わなかったが、事後郁が来訪する目的について首をかしげた台湾人はもう一人いた。

日本語作家郭水潭も回想記の中でその疑いを吐露したことがある。台湾滞在中の郁に会ったことがある彼は次のようなことを書いている。

「郁は台湾滞在中まるで走馬灯のようにばたばたしていた。一体何のために來台し、また滞在中は何をしていたのか、憶測をよぶ。」「奥さんの王映霞女史と喧嘩別れをして寂しいあまりに傷心の旅をはじめたという人もいれば、日本の誘惑の網にかかって政治の道に走ったという人もいる。前者よりも後者の可能性は濃厚かもしれない」²⁶。

郁達夫は日本統治下の台湾を公式訪問した唯一の中国大陸系新文学者で、時はちょうど「盧溝橋事件」が発生する6ヶ月前である。確かに、彼の訪問には「侵略主義者の言いなりになった」と台湾本土の作家たちに見られても仕方がない要素がある。しかし、それと抗戦中に遥々と南洋まで行ったことと関連付けて、「侵略者の魔の手を逃れるため」と決め付けるのはいささか乱暴であろう。彼らにこういうふうに使われてしまった理由は二つあるかと思われる。一つ目は御用メディアの影響。郁達夫が「親日家」だという先入観を持っていたことに根ざしている。二つ目は「盧溝橋事件」後郁が国民作家として猛烈な反日の立場にいたことを知らなかつ

25 1983年12月台湾雑誌『文訊』から引用した。日本語は拙訳によるものである。

26 郭水潭『憶郁達夫訪台』、初出1954年台湾『台北文物』第3巻第3期。

たからではなかろうか。

『躍進台湾を正視しに』の中で、郁達夫がはじめて日本語で西安事変をめぐって思い切ってコメントし、帰国後事変が思わぬ展開となったので二度と口にしなかったことがある。ここで紹介しておく。

「張学良はお坊ちゃんて結局は駄々をこねているようなものであるが、蒋介石氏が暗殺されていない所に今回の事件の特異性があり、この点日本の人も研究すべきで十年前なら恐らく直ちに暗殺されていたと思われる。日支の関係は最後は互譲にあり又そうあるべきものだと思っている。互いに手を握ってこそ極東の明朗化はあるわけで日支両国の上層者は又その考えであり、殊に自分の専門の文学者同士では完全に意見が一致している。併し、そう簡単にいかない所に悩みがある……」。

前掲東文献資料『郁達夫資料——作品総目録、参考資料及び年譜』（下）によれば、西安事変発生後の三日目（12月14日）、郁達夫は要請を受けて東京日比谷陶々亭で催される「西安事変と日支関係座談会」に出席したとなっている。その座談会で郁が西安事変に関して何も発言しなかった、ということは考えにくい。しかし、関係資料は今日に至るまで未見のままなので、ここに引く神戸港で『台湾日々新報』社記者の取材に応じた郁の言論を、事変直後に公然の場で発表された貴重なコメントとして位置づけたい。

1936年12月12日に西安事変が起こった際、郁達夫は東京訪問の真最中だった。大阪『毎日新聞』をはじめ、全国紙は我先に「西安事変」について社説やコメントを発表し、それが中国の共産勢力の台頭を意味し日本政府は傍観してはならぬと呼びかけていた。メディアが騒ぎ立てる中、一時的には日中両国の関係は一触即発の状態になった。このような危機感の中で郁達夫が日台両地の訪問を終え、帰国してから間もなく政論『日本の朝野よ支那を見直せ！』を書き、『大阪毎日新聞』（1937年1月4日）に発表した。その主張は『躍進台湾を正視しに』および12月23日に催された台北市民講演『支那文学の変遷』で述べられた観点とも完全に一致していると思われる。

今回の調査で、1936年末当時の中日関係に関する郁達夫の見解には次のような二つのポイントがあることが判明した。それを通して彼の「国民作家」の立場が窺えるのみならず、中国共産党および中国社会の発展方向に関する郁の見解が極めて幼稚であることを垣間見することもできる。

まず一点目、日本の武力行使による中国侵略を極力阻止しようと思っていること。そしてそれが両国の上層部を遊説することで実現できると信じている。

「日本の言分では、日本は中国を侵略するのではなく、共産勢力の中国に侵入するのを防止せんとするのみである、中国政府にまかしては、とても安心できないから、満州国をこしらえ、冀察政権を樹立しなくてはならないと……それが却って逆に中国に共産思想を激発し、共産勢力を堅固にしたとは見当つかなかったであらう」。「中国本部における日本駐屯軍の増員は、徒らに中国人の猜疑心を刺激し、対日悪感を増長

させるもので、「もし日本が軍事的侵略をやめ、好意的に中央政府の統一に助力し中国の内政に容喙干渉せず、互惠平等の原則のもとに経済合作を計って行くとせば、中国共産党はまづ成長する機会が少なくなるであらう」し、「今後中国における共産党勢力の増進か萎縮かは、一に日本の出方にかかっている」²⁷。

二点目は、中国が必ず「全面的に共産化する」という日本の認識があくまでも「誤解」にすぎず、解消できると思っている。

「張学良の振りかざした旗印は、抗日聯共といふから、日本人間の一部の論客は、すぐに支那は赤化した、共産化したと早合点する」、「西安兵変が起こったからとて、直ちに中国は共産化するのはいささか早計な話である」、「中国全国を共産化し、現存の中央政権を根底から覆してしまふといふようなことは今のところまづ全然出来ないと見てよい」²⁸。

中日両国宣戦布告6ヶ月前にしては、中国でも有数な「知日派」である郁達夫はあまりにも楽観的すぎるということがこの度佚文の『躍進台湾を正視しに』によって改めて確認できたのである。

(四) 台湾に関連のある郁達夫の著述

郁達夫の台湾訪問は、二十世紀80年代後半に「文学大事件」として台湾史研究者の葉石濤氏によって次のように『台湾文学史綱』に記載されている。

「郁達夫は1936年12月22日に来台し、センセーションを巻き起こしている。台北だけでなく、台南などでも台湾作家主催の歓迎座談会が催されていた。だが、郁は台湾に関する作品を残していない模様だ」²⁹。

著者葉氏の政治的背景は明らかではないが、わざわざ台湾までやってきて、台北に続いて台中、台南と方々に見て廻って結局何も書いてくれなかった。大物文学者としては如何なものかと、マイナス評価に読み取れなくもない。「郁達夫の台湾訪問は単なる個人的な観光旅行にすぎず、同じ炎黄の子孫としては植民地に身を置かれ喘ぎ苦しむ台湾同胞の生き様にはしかるべき同情が見られない」と読者に訴えようとばかりしているようにすら感じられる。

確かに、郁達夫は台湾訪問出発時には「視察の結果はやがて紀行文にする心算である」と台湾メディアに公言した。しかし、従来中国大陸と香港で出版された郁達夫の著作集を丹念に調べても、1936年末から1945年の秋にスマトラ島で殺害されるまで、直接台湾訪問を題材とした小説や詩（新、旧体詩）および随筆雑文といった文学作品は皆無に近い。時の台湾政治および台湾地元文学に対しても評論といえるような言論もなければ、活字もない。

27 1937年1月4日『大阪毎日新聞』11面に掲載された『日本の朝野よ支那を見直せ!』による。

28 この引用も同じく『日本の朝野よ支那を見直せ!』によるものである。

29 葉石濤著『台湾文学史綱』p.16、台湾高雄、文学界雑誌社1987年2月1日出版。

ところが、今回の資料調査で意外な発見があった。

1936年12月30日と31日の二日間、つまり郁達夫が「福建丸」で台湾の高雄港を出て福建省のアモイの土に足を踏み入れた当日と翌日のことだが、彼はアモイ地元新聞『星光日報』と『江声報』の取材を受けたことがあり、日本統治下の台湾政治と台湾新文学を忌憚なくとりあげて厳しい批判の姿勢を見せている、ということがわかった。さらに、台湾訪問から帰国して三年後の1939年12月の末、郁はまたシンガポールの『南洋商報』に『わが国の言語と文字』と題して文章を発表し、再び台湾訪問に触れ、言論自由の問題、そして日本政府が台湾で推進した「皇民教育」に対して極めて憤慨している。知名度がほとんどない小さなアモイ地元の新聞紙だから、いままで知られていないのも無理もない。しかし、これらの「モノ」は郁達夫本人の著述であることは間違いない。

アモイ『星光日報』と『江声報』両紙に掲載された郁達夫インタビューには本人の署名文ではないため今までの郁達夫文集または研究資料に収録されなかったかと推測しているが、『わが国の言語と文字』は佚文として2007年11月浙江大学出版社から出た最新版の『郁達夫全集』第8巻に納められるまではその存在すらほとんど知られていなかった。これらの原資料を読んでいるのであれば、日台訪問後の郁達夫が、台湾に対する日本の植民地化支配を何度も厳しく非難したという事実は当然知る由もない。

筆者はまず1936年12月30日および31日の『星光日報』と『江声報』に掲載された二つのインタビュー記事について丹念に調べた。両紙それぞれ自分の報道スタイルをもち、インタビューの掲載日も一日の時間差がある。しかし、記者の似たり寄ったりの質問に対して郁達夫の答えはほぼ完全に一致している。この一致は逆に両紙が伝えた内容の信憑性を裏付けてくれた。つまり郁は『星光日報』と『江声報』二紙の記者に対してほぼ同じ答えをしたということを意味しているからである。

二編のインタビューからは次のような二つのポイントが読み取れる。

その一、新旧文学を含む既存台湾文学への辛辣な批評。今で言えば「酷評」とも言えなくもない。たとえば、彼はこのように指摘している。

「文学においては、彼ら（台湾人作家）は作品の数が非常に多い。しかし、優れたものはめったに見ない」。

「統治者から方々の圧迫を受け、台湾の青年たちは悩み苦しんでいる。彼らは中国語文と日本語文の間を彷徨い、生存環境のせいで前者は長時間学習できないため基礎が非常に浅い。後者はさまざまな風習で日本人に及ばないのは無理もない」³⁰。

というふうにその原因にも言及している。

その二、台湾に対する日本当局の「白色テロ」的な支配への批判。郁は

30 趙璧『郁達夫在厦門』、1936年12月31日『星光日報』。

「日本人は台湾人の思想の自由に対して極力制限しようとし、あの手この手を尽くして中国との関係を忘れさせようとしている」。

「台湾の青年は作品を発表するところがない。三々五々道路沿いで立ち話をするとたちまち警察から干渉される」³¹。

「盧溝橋事件」発生から二年後の1939年の暮れ、郁達夫はシンガポール三角埔中国語文学院主催の講演会で再び台湾人のアイデンティティ問題を提起している。彼はかつての台湾訪問時の自らの見聞に言及し、

「台湾が減ぼされた当初子供が『三字経』や『千字文』など読むことを許された。だが、僕が台湾を訪れた際は子供の漢文学習はすでに禁じられていた。なんと悲しむべきことだろう！漢文を勉強してはならぬばかりか、日本語の読み書きを強いられていた。言論に関しては、それはまた厳しい束縛があり……たとえば、寄席で講談を聞きたくても真夜中になって誰もいないときに玄関を閉めて小さな声でしゃべってもらわないとならない。三々五々同行し、談笑しているときには必ず後ろで尾行している人（警察）がいる。話が少しでも政治に触れているなら忽ち逮捕となり、くさい飯を食うことを余儀なくされる。このように、言論の自由もないし、生活の自由もないなら生きているよりも一層死んだほうがましだ。亡国の惨めさを十分窺うことが出来る」³²

と振り返っている。

三角埔での講演は思いっきり鬱憤を晴らすことができなかったからだろうか、わずか数日後彼はまたシンガポール紙『星洲日報・晨星』に寄稿し、台湾で行われている「皇民化」支配に触れている。

「台湾に滞在していたころ、民衆が中国語の本を読むことを政府に禁じられ、日報も漢文版の出版を禁止されていたころの悲惨な状況を自分の目で見た」。三年前の出来事だったが、「思い出すと鳥肌が立つ。それに比べれば、その悲壮感アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet, 1840-1897) の『最後の授業』を超える」³³。

以上、わずか数例であるが、台湾で郁達夫が受けた植民地文化のショックがいかに強烈なものであったかがわかる。彼の台湾訪問は元々日本外務省が「日支親善促進のため」に企画した著名人文化視察活動の一環であるため、台湾滞在中はすべて台湾最高権力執行行政機関の総督府直轄の外事課の接待を受けていた。『台湾新民報』主催の「郁達夫座談会」であれ、『台湾日々

31 趙璧『郁達夫在厦門』、1936年12月31日『星光日報』。

32 郁達夫『わが国の言語と文字』、初出1939年12月1日シンガポール『南洋商報』。

33 この文章は郁達夫が1939年11月30日に行った講演『わが国の言語文字』の補充編である。初出は1939年12月5日のシンガポール『星洲日報・晨星』、ここの引用は『郁達夫文集』第7巻 p.135による。

新報』主催の「郁達夫学術講演会」であれ、台北市内で行われていた郁達夫の文化活動は悉く台湾当局の監督監視下にあった。島内各地訪問先で使用される言語は植民地台湾のオフィシャルランゲージの日本語で、文学活動のほとんどが行われた台北市では彼は中国語（あるいは覚束ない閩南方言）で台湾地元の文学者たちと交流する機会は結局なかった。

台湾訪問最後の日に、数名の台湾文学青年が郁達夫に会うために私服警察の目をぬすんで台南鉄道ホテルに潜入しロビーの一隅で「国語」で書いた小説や詩の習作を渡したことがあると当事者の回想記で知られているが、「非公式言語」の中国語による会話は危険が身に及びかねない上、さらに時間と場所の制約もあるので、遺憾は残るが、双方は思う存分に交流することが到底できなかったのである³⁴。

結 語

郁達夫は非常に複雑な人物である。1913年に留学のために来日し、翌年国費留学生の資格を取得した後、一高予科、八高を経て東京帝国大学経済学部に入るといった中華民国エリート留学生の出世コースを辿っていた。来日後の彼は日本近代文学の名作を読破し、東大在学中芥川龍之介、佐藤春夫、谷崎潤一郎らと交友関係をもちつつ、一高の同期だった郭沫若（九大医学部）、成仿吾（東大造兵科）、張資平（東大地質科）らと一緒に文学グループ——創造社を東京で立ち上げ、後の中国文学界にセンセーションを巻き起こした。日本にいる彼らは「新浪漫主義」の旗を掲げて、「人の文学」を主張する魯迅兄弟³⁵が中心的な存在である「文学研究会」派と真正面から対抗していた。国内新文学界に殴り込みで頭角を現し、魯迅から「才子プラスごろつき」の悪名を与えられた彼らは、突然新浪漫主義を投げ出し日本プロレタリア文学の受け売りで旗印を「革命文学」に換えて左急旋回して文壇を震撼させた「異軍」であった。北伐革命後、郭沫若は蒋介石に追われて十年に亘る日本亡命生活を強いられるようになるが、郁達夫は創造社から脱退し、魯迅と仲良くなった。彼は最初の「革命文学」の提唱者として中国左翼文学の体質に影響をあたえたものの、共産党の指導を受ける「排他的」左翼文芸連盟とは結局うまくいかなかった。「盧溝橋事件」発生後文学者抗日統一戦線には名前があるが、1939年からは自ら祖国を離れて南洋に行き、スマトラで日本憲兵に殺害されるまで国内の文学界とは「不即不離」の関係を保っていた³⁶。

一方、郁達夫と日本との関係も決して単純とは言えない。留学生時代から佐藤春夫を師として仰ぎ数多くの文壇逸話を残しているものの、戦争協力の姿勢で書かれた『アジアの子』³⁷を武

34 台湾作家郭水潭の『憶郁達夫』（『台北文物』3-3）では、この非公式会見について書かれている。それによれば、会見時にはホテルの一階のトイレに日本の警察を刺激するような内容の落書きが見つかったということでロビーを私服警察が走り回っていたということである。

35 周樹人と弟の周作人のこと。

36 郁達夫殺害の事実は『郁達夫資料総目録附年譜』（伊藤虎丸、稻葉昭二、鈴木正夫共編、1969年10月東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター出版）による。

37 佐藤春夫原作。初出1938年3月号『日本評論』。

漢で読んで直ちに佐藤との絶交を宣言し、そして『日本の娼婦と文士』という檄文を発表して昔日の師を罵倒した³⁸。こうして何かがあるとぶれが激しく、しかも極端に走りやすいという印象を人々に持たせてしまう郁達夫だが、それでも日本では多くの文学者や研究者たちに愛されている。周作人は武者小路実篤のような文壇大物と交友しつつも終始「北京大学教授」の構えを崩さず、郭沫若は日本亡命期からは文学者のみならず、中国古代史研究の名高き学者そして革命活動家でもあるためか人を寄せ付けぬ威厳を感じさせる。日本人文学者たちにとっては、郁達夫は純粋な文学者で腹を割って話せる数少ない支那人の「知己の友」の一人であった。

二十世紀30年代後半から、日中両国の上に戦争の暗雲が覆いかぶさっていた。1931年の「満州事変」や翌年の上海事変後の日本軍の急増兵を目の当たりにしていた郁達夫は、中国国内で排日、反日の気運が日々高まる中、両国間の全面戦争は上層部の話し合いや文学者の相互理解で回避できるものと楽観的に思っていた。そして訪日の間はマスコミを介して日本政府や多くの文学者たちに真の相互理解を必死に呼びかけていたのである。

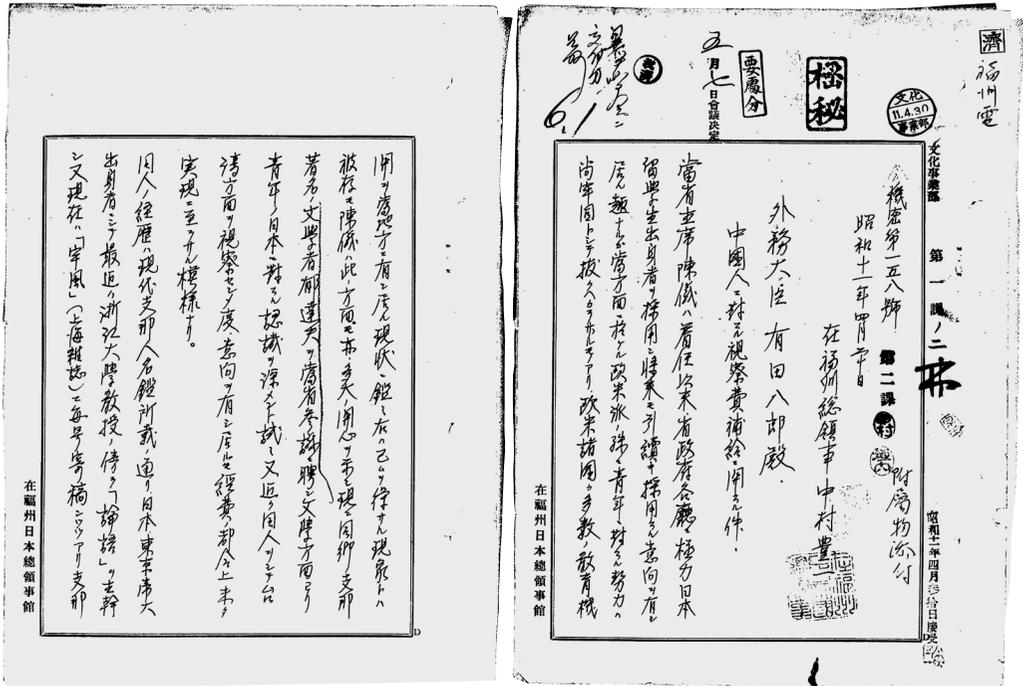
「盧溝橋事件」勃発後に始まった中国に対する日本の侵略戦争によって、郁達夫の心の奥底にある日本を愛する気持ちは無残にもずたずたにされたにちがいない。民族の存亡に関わるときには、一人の中国人として民族意識が上昇し、思考回路の中では敵か味方かの判断が最優先となり、ものの考え方もついに変わってしまうのも当然と言えば当然であろう。中日全面交戦開始6ヶ月前に日本と台湾を訪問したことについては、郁達夫自身は嘗て何度も言及していた。訪日の目的は学術講演と福建省政府広報室用の輪転機を購入するためとか、台湾は帰国のついでに立ち寄っただけだとか自ら何気なく言っているが、事実はそうではなかった。では、彼は一体何故、日台両地の訪問が日本政府の公式要請であり、そして高額補助金までもらった事実を隠さなければならなかったのか。わたしは盧溝橋事件勃発後の彼を激しい抗日派に急変させた民国作家の立場にその答えがあると思われるが、紙幅の関係で今後の継続研究の課題とする。

*小論は平成23年度日本現代中国学会西日本支部春季研究集会で発表した内容を元に書き上げたものである。

38 初出『抗戦文芸』第1巻第4期。

<史料>

① 在福州総領事村豊一が外務大臣に宛てた極秘文書（一枚目）



② 1936年12月20日付『台湾日々新報』11面記事

